

名あり、廣義に解すれば假名草紙、浮世草紙をもこの分類中に攝すべく、實際讀本の稱は、すでに八文字屋本のみづから唱ふるところなりしが、今日いふところの讀本は、通常、更に狭き意義に用ひられ、かの英草紙に端を發して、漢文學の影響極めて深く、専ら勸懲主義を標榜して、寛政頃より盛に行はれ來れる半紙形の小説をば稱するなり、これが作家の棟梁は曲亭馬琴なることいふまでもなし、しかもこれに先だちて山東京傳ありしこと忘れざれ。

山東京傳

山東京傳は江戸の町人なり、若き頃より狹斜の巷に出入して、頗るその事情に通ず、もとより學問は博しともあらざりしかど、超凡の趣味を有して、文藻また群衆に絶す、畫技にかけても天稟の才あり、初は錦繪を作り、また青本の挿畫を描くこと多かりしが、青本の譽世に喧傳するに至つて、専ら著作に身を委ね、これよりさき、その年漸く三十前後にして、はやく戀川春町、明誠堂喜三、芝全交等の諸先輩と其の肩を並べ、ついでまた洒落本に指を染めては、絶技の名高かりき、寛政二年、幕府が猥雜なる書籍の發行を禁じたるにも拘はらず、書肆萬屋重三郎の勸黙しがたくして、洒落本を作り、その翌年、手鎖五十日の罰に行は

る。京傳もと小心翼々たるもの、深くこれに懲りて、二三年が間は筆を執らず、僅かに馬琴をして數種の青本を代作せしめしのみ、その後また青本の著作に従事せしが、當年の騷壇を驚倒せし自在の筆致、滑稽の情趣、今いづくにかある、ただ教訓を主とすといひて、詩味索然たるもののみ多し、按ふにこの間は筆路滯りて、感興湧かず、寧ろ兀々として商業に勵み、蓄財に忙はしくして、著作は第二義のこととしたりしが如し、更に數年を経て讀本を出す、蓋し時勢の推移に見るところありて、この轉化を試みたるなり、この頃より馬琴の名やうやく文壇に高くして、肩をその師分たる京傳に並ぶ、京傳に年來の聲望あれば、馬琴に新進の意氣存す、かれ一書、これ一書、二者の競争ははしなくもこゝに始まりて、互に角逐して相下らず、屢、相似たる材料をさへ捕へて、伎倆の優劣を世に問はむとす、また一代の偉觀なり。

京傳の讀本

京傳の作を見るに、文字は平易流暢にして、その人物は馬琴の作に多きが如き、道義的觀念の權化を見ること稀なり、これらや、今日、渠が動もすれば馬琴以上に評價せられむとする理山なるべきが、概していふに、讀本における京傳は到

底馬琴の敵にあらず、滑稽を主とし、寫實を旨とせる短篇の青本、洒落本こそ得意の壇場なるべけれ、長篇の讀本に至りては結構の才に乏しき處の能くするところにあらず、そのいつしか馬琴に凌駕せらるゝに至れるもの、固よりその所のみ、元來京傳は遅筆なるに、その意志また強からず、精力に任せて數千言立ちどころに下り、年々數種の讀本を出して平然たりし馬琴に比ぶるに、すでに作物の量において非常の逕庭あり、殊に讀本の作者として、山東庵はその質において、曲亭に三舍を避けたり、蓋し渠は風俗人情の觀察寫實にこそ非凡の才を有して、よく精微の趣致を捕へ得たれ、その想像獨創の力に至りては小説家としてあまりに缺如するところあり、組織的才能にさへ乏しければ、結構脚色に重きをおける讀本の述作に適すべくもあらず、一に從來行はれ來れる戯曲脚本を粉本として、その斷片を補綴し、變化なく、はた統一なく、陳腐なり、散漫なり、讀者は屢、菜を拵みて倦怠の弊を發せずんばあらず、この傾向は渠が作中にありて最も有名なる昔語稻妻表紙に於てすでに十分に認むべく、その續篇本朝醉菩提に於て殊に著しく、その絶筆雙蝶記に至つては、馬琴が術學的なる

を厭ひて、力めて平俗を期したれど、支離滅裂の弊はこゝにその極度に達したるが如し。

曲亭馬琴

今や余輩は江戸時代における小説家の泰斗曲亭馬琴を説くべき時となりぬ、馬琴は江戸の人、その家は士分とこそいへ、渡用人の地位甚だ低ければ、資産とても豊かならず、職業の選定に迷ひて、幾度か方向を轉じたる後、寛政二年に至りて始めて京傳によりてその作を公にす、時に年二十四、こゝに渠が立脚地は明かにせられたれども、いまだ聲望は添ひ來らず、その隆々として喧傳せらるるに至りしは、三十六歳にして京坂を漫遊せる後にして、これより盛に讀本を著はし、京傳の名もこれが爲に味く、ますます創作を續けて、殊に長篇に筆を揮ふ、青本の變形なる合巻に浩瀚なるものを出すに至りしも、實に渠を以て嚆矢とす、馬琴は性來の達筆なるに加へて、身體頑健、意志あくまで強固なれば、成さむとして成さざることなく、晩年に及びて不幸にも過勞の爲に明を失ひしが、なほその口授を先だちし子息の遺妻に筆記せしめて、いまだ會て安逸を思はず、遂に八十二の壽盡くる時、二百種に餘れる著作を殘せり。

馬琴の讀本

馬琴が京傳にまされる特異の點は結構の才にあり、自己の藥籠中に收めし材料も、その量においてこそ違へ、質においては和漢の古書載籍敢て京傳が取りたるものと異なるところなかりしが、その結果において著しき差等を生じたるは、一にこれを咀嚼し消化し、換骨し、脱胎する能力の不同に由らざればならず、京傳は短篇の中にも甚しくその脚色の絲を錯雜混亂せしむ、馬琴は好みて長篇を作れども、條路常に整然、照應歴々として掌を指すが如し、而して渠の如く多作し、渠の如く速成して、なほかつ京傳の如く類似重複の點少く、變化を生まみ波瀾を重ねし手腕に至りては、さすがに欽仰せざるを得ず、これおほかたは馬琴が本來の才氣に俟つものなるべしといへども、しかもまたその根氣に任せて博覽多讀、眼を古今内外の書籍に曝しし賜にして、支那小説の感化はわけて偉大なるものあり、中に就きて忠義水滸傳の如き、演義三國志の如き、西遊記の如き、金瓶梅の如き、水滸後傳の如き、三途平妖傳の如き、快心篇の如き、また隨筆五雜俎の如きは、絶えず渠が材料の供給を仰ぎたりしものなりき、げにや萬卷の書を讀破して、識見遙かに時流を抜きしは、深くみづから誇るところにし

勸懲小説

て、渠が生涯を通じて、いはゆる戯作者の地位に立ちながら、ひとり傲慢不遜他の群小作家を眼下に視たり、幕府が令を下して小説の述作に窘束を加へたりし際も、かゝる時泰然たるもの乃公一人のみと自負し、勸懲主義の麾下にたて籠りて筆硯益壯なりし著述堂が得意、豈想見すべからずや、さればいはゆる小説における勸懲主義は馬琴に至りてその最高調に達したるなり、概していふにこの主義を標榜する小説には血あり肉ある人物を見ず、主人公はいづれも忠孝仁義などの美德の觀念を寓せる傀儡子にして、その一舉手一投足もみな窮屈なる道義觀によりて操られ、誤つて人間の最も自然なるまた最も陥り易き情念によりて虜にせられざらむことを寤寐に希うて止まず、作者はこれらの人物に向つて滿腔の同情を瀝いて及ばざらむを恐るゝと共に、これに反照せしめむが爲に、また罪惡の觀念を具體化したるが如き人物を點出し來るは、その常用の手段なり、たゞそれ意志の偏重ありて感情の發動なし、男女の相寄りても木石相對するが如き觀ありしは必然の結果のみ、かくて當代の作家が求めむとしたる變化は、一に事實の表面にありて、内的心理

文體の尙古

の描寫にあらざれば、出て來り出て去る人物いづれも同一模型中のものとなり、個人的ならずして普遍的に、褊狹にして沒趣味なるが多かりき。當時讀本のほかに廣く民間に喜ばれたるものは合巻なり、合巻は滑稽を主とせる青本が進んで眞面目なる續物語となれるものにして、この變化はまた讀本の感化に出てたりとすべし。一枚毎に挿繪あれば、専ら婦幼に歡迎せられしが、平易を旨とせるその内容は、これを讀本に比するに、相似て大に劣れるものあり。いま茲に余輩は、馬琴を中心として、合巻讀本を一括せる當時一般の傾向を窺はむとす。前にもいへるが如く、作家は力めてその作物を高尚にせむとし、その著述を以て士君子の覽に供せむとしたれば、その結果は、おのづから形式における尙古主義となりて現はれ、故らに七五の古調を散文の上に弄して、みづからその自由を妨げたるは、西鶴が放縱なる破格の文章に比べて、絶好の對照をなす。用語も穿鑿に苦心し、和漢の古典を涉獵して、その中より摘萃すれば、絢爛綺麗の色はありしかど、印象の明瞭は缺きたり。

尙古主義はなほ材料に及んで歴史小説を出す。當時文學の中心はいふまでも

歴史小説

なく江戸なり、江戸の地は武士の花と仰がるゝところなり、江戸の文學は従うて武士を寫さずんば人氣を博せず、加ふるにまた作物を高尚にせむとする作者は、自然に筆を社會の上流に立てる武士に向く、しかも武士を寫さむとして、渠等は眼を中世の歴史に向けたり。これ一つには徳川幕府が江戸時代の事實を寫すことを嚴に取締りたるにもよれど、また一つには現在と相隔つる時劫の霧の縹渺たる色彩を添へて、高遠の趣あるが如くならしむることを知りたるが爲にして、殊に馬琴の如きは源平盛衰記、吾妻鏡、太平記、鎌倉大雙紙等を材料として、好みて源平時代以降戰國に至るまでの史實を脚色したりき。人或は問はむ、その題目によりて見るに、馬琴の小説も明かに世の流行に伴ひて、元祿以來の戯曲脚本に基きしもの多きにあらずやと。然り、渠もまたお夏清十郎を寫したり、お染久松を寫したり、三勝半七を寫したり、お俊傳兵衛を寫したり、されど一たび渠の筆に上りては、これ等の人物も、もはや優柔浮靡の情郎情婦にあらずして、節操松柏の如き忠臣なり貞女なり、その愛情の如きも放恣なる情慾に出でたるにあらずして、義理によりて相寄れるものなるか、さらでは別に

當代の人世観

避けむとして避くべからざる理由あるによとなす、松染情史に、お染久松は南朝の遺孤なりとして、全く本來の二人が痴話を外にしたるが如きは、その一例なり。

さらば避けむとして避くべからざる理由とは如何。そもく家系尊重、個人没却といへる離るべからざる二個の思想が、江戸時代を通じて人心を左右したるは、すでに概観の章下に説き盡したれば、今更に繰返さずともあるべし。この思想と當時また歓迎せられたる因果應報の説とは小説の上に殊に膠漆の如く結ばるべき因縁ありき。作中の人物はいづれも特立獨行すべき自己の一身にあらず、自己と稱するも祖先より子孫に傳へて悠久なる時代の一期を劃するものに過ぎずして、その行爲は祖先に對して深重の關係を有すると共に、子孫に對してもまた重大なる責任あり、異性戀着の情の如きも決して偶發せるものにあらずして、數代もしくは數十百千年の昔なる相思の男女が、輪廻し來りて、その嘗て果さざりしところをこゝに遂ぐるものとし、善人の禍に遇ふも過去の咎、すべて人間一身の現在の禍福はまのあたりなる自己が行爲の結果

偏固なる倫理観

にあらずして、世を變へ代を隔てて附き纏へる先祖以來の應報にして、才も移すべきにあらず、徳も避くべきにあらず、たゞ手を拱いて未前劫より未來劫に涉れる一大運命の翻弄に任せつゝ、一上一下、その生涯を浮沈せしむる外なしとす。かくの如きは當時の作家が一般の人生觀にして、支那小説の影響もこれありといへども、主として家族主義の系統偏重より來れる傾向が佛家の因果説に抱合して成れるものなるは疑ふべからず。

系統を尊ぶ世には、女子よりも男子が勢力あること、いふまでもなきことにして、女子はむしろ家督相續者を擧げむが爲の機械の如く思惟せらるれば、その妻に子なければ、男子が妾を蓄ふるも、道義の上より當然の處置として許さる。未婚の男女が相愛するは、放埒多情、意志の節制なき破廉耻の行爲とし、たゞ渠等はすべてに夫婦たるが爲に、または許嫁の約束あるが爲に、始めて愛情を交はすことを得るなり。されば小説中の佳人才子が思慕の情は親と親とが結べる縁あるが爲にして、夫婦の關係をもやがて親子の關係に歸し、愛も移して孝に化せずんば止まず。忠と孝とは當時の小説にしばらくも缺くべからざる金言

なり。總じて當時の小説殊に馬琴の如きはあまりに道義の觀念に強く、何事もこれによりて律せむとすれば、作者は作中の人物に對して恰も裁判官なるが如き觀あり、固より勸懲といひ、はた教訓といふも、一概に文藝の上より排斥すべき所以なし、然のみならず、活眼を開いて廣く人生を望めば、紛々擾々として法則なく束縛なき間に、おのづから動かすべからざる免るべからざる造化の妙配劑のあるあり、従うて作者が隱密の間に道徳的批判を挿むもまた妨げず、時にはこれによりて愈、その作をして味あらしむる効あるべしといへども、故らに自己の倫理觀によりて練り上げたる典型的人物を標準として、一般社會に向つてこれに合一せむことを求め、觀念を具體に示さず、屢、抽象的批評を挟みて篇中の人物を論議するは、思はざるもまた甚し。わけて馬琴等が懷抱せる倫理觀なるものは極めて獨斷にかつ褊狹なるものなりしかば、その理想的性格を具足せる忠孝兩全の士として示せるものも、従つて頑冥に固陋に沒常識に、いはゆる融通のつかぬ人物のみ多く、おしなべて彼も此も同一の性質を帯ぶるの嫌ありき。

一九と三馬

十返舎一九、式亭三馬は京傳、馬琴と同時代の人なり、同じく小説家といへども主とするところは滑稽本といへる一類にありき。滑稽本は洒落本に出て、洒落本が風俗紊亂の誹ありしを以て、これは専ら社會の瑣末なる事相を捕へて、無邪氣なる笑を取らしめむとしたるもの、また當時の太平を粉飾するにふさはしき一種の文學なりしなり。一九が作にては東海道中膝栗毛最も著はる、こは彌次郎兵衛、喜多八といへる二人の剽輕なる江戸つ子が、あらゆる社會の拘束を脱し、禮儀もなく、格式もなく、善惡是非の關係をも離れて、面白をかしく呑氣なる幾十日の旅行に浮世の外なる生活を現出せることを寫せるものにして、その誇張せる滑稽の讀者をして手を拍ち腹を抱へて大笑せしむるもの少からず。三馬の傑作は浮世風呂と浮世床となり、共に滑稽本の粹にして、膝栗毛と併稱せらるゝものなるが、膝栗毛とこの二書とはその觀察取材の點において著しき相違あり。前者は現社會を寫すといふも、描かれたるものはこれを離れたる別天地の觀あるに、後者はあくまで世相に執着して、人間通有の弱點に對する諷刺を試みたり。されば同じく滑稽といふも、かれにありては、あり得べし

とも思はれざるほど常識を外れたるもの多く、これにありては苦笑一番、人をして首肯せしむるものあり。さはいへ、三馬が社會實相の描寫も一部少數の人間に局在し、それも單に身振物いひなどの表面に現はれたる缺點を捕捉してこれを誇張するのみ、終に人生の奥底に入りて、これが解剖を企てむとはせざりしなり。さて一九といひ、三馬といひ、渠等の小説は、現代を謳歌して、太平の逸民が作よとうち頷かるゝもの多し。こは強ち幕府の消極的方針に契合せしめむとの用意とのみにもあらざるべく、むしろ當時一般の風習よりこの現象を醸ししものなるが、とにかくに施政者の鐵槌は直ちに不平遠俗の徒に下りしを以て、いよくこの墮壞鼓腹主義の歩武を一致せしめ、従つて一代の著作を舉りて一種の典型中に陥らしむるに至りしは、推知するに難からず。

種彦と春水
一九三馬と雁行して柳亭種彦合巻に名あり。その修紫田舎源氏は、源氏物語を翻案して室町時代にうつし來り、平安朝の純情小説を化して、武士道主義の勸懲小説としたるもの、紙價爲に高かりしが、時の政府は小量なり、これだに忌諱に觸れて、三十八巻を以て中止せざるを得ざりき。とにかくに文學者として種

馬琴の積極的態度

彦は京傳、馬琴とは固より同日に談ずべからず、一九三馬にも劣るところあり、そのしかく喧傳せられたる所以は、合巻の内容に存せずして、挿畫の意匠に長けたるが爲のみ。さてこれらの小説家を敍したれば、また序に爲永春水の名を逸するを得ず。春水がよりにて文壇に重きをなし、は、その人情本にあり、人情本もまた洒落本より出てたるものにして、主として男女の愛情を描く。春水自ら狂訓亭と稱して、訓蒙に資すといひながら、ひそかに下劣なる辭句を弄して、卑俗なる讀者の歡心を買はむとす、その當局者の眼に觸れて罪を得たりしこと、言はずして知るべし。

余輩は曩にこの時代の小説は道德主義の見地より多く忠勇貞節なる人物を主人公となし、これ等の主人公は因果の理法に従ひて種々の艱難辛苦に際會し、渠等もまたこれを以て抗すべからざる運命なりと觀するを常とすといへり。然り、かくの如きは當時滔々たる作家が用ひたる脚色の大概にして、基とて此の社會制度の影響にあることまた嘗て述べたるが如し。さらばこの服從的態度は遂に變ずる期もなく、また一人のこれに對して反撥するものなかりし

か否然らずかの馬琴は勸懲主義の泰斗なり、しかもその偉大なりしだけに、これが壓迫を感ずることも、また人に超えたりけむ、圓轉滑脱の間にも年を経るに従うてその消極的態度を脱して、別に積極的描寫を試みたり。渠、古史を繙きて、有名なる英雄豪傑の末路の悽慘なるもの少からざるを見て、衷心不平の情に堪へず、その荒誕なる想像力に任せて、更に自己の小天地を造りて禍福相轉せしめ、以て渠等の幽魂を弔ふと共に、遣りがたき自己が胸中の鬱塊を洩らさむとす。見よ、渠は椿説弓張月に、爲朝はわが國土に力を延ばすの餘地なきを以て琉球に渡り、その子舜天丸以後、子孫相ついでその地の王となると記し、俊寛僧都島物語に、鬼界の孤島に流竄せられたるかの僧都をしも、空しく雄圖を懐いて死せしめず、更に歸り來りて兵學の秘奥を義經に授け、以て源氏復興の基を開かしめたりとなせり、もしそれ馬琴が作中の最大長篇たる南總里見八犬傳に至りては、安房里見氏の興隆を骨子として、鎌倉管領の勢を以てするも、關八州の兵を以てするも、仁義を守りし彈丸黒子の小藩に勝つ能はざりしとす。その他、弓張月の跡を追うて、三郎義秀をして遠島に勇を奮はしめむとしたる

朝比奈巡島記の如き、南朝忠臣の遺孤をして、足利義滿を金閣に射殺して父祖の讐を報せしめたる開卷驚奇俠客傳の如き、いづれかこの例にあらざるべき。かく運命に屈從する消極的態度を一變して、進んでこれに抗し、これを開いて自己の才幹を發揮せしめし積極的態度こそは、馬琴が當時の作家中に一頭地を抜ける最大特色にして、その小説の規模の雄大なる所以もまた實にこれに職由す。さらば馬琴をしてかゝる傾向に移らしめたるは如何なる勢力の爲ぞ。或は曰く、そは歴史を讀むものの感ぜざる能はざる不平に基けるのみ、人生の偏頗多きに對する自然の人情に出でたるのみとされど思ふに、こは當時一般の小説家が社會の消極的束縛に對して等しく胸裡に貯へたる反抗心を、偶、馬琴が事蹟を古代に借りて放射したるものにあらざるなきか、而して馬琴をしてかくの如き思想を懐くに至らしめしものは、また恐くは國學の發展に存せむか、かの八犬傳における里見氏が皇室を重んじ、これに仕ふる八犬士が氏姓を改めむとするに當りても、朝廷に奏請して後始めてこれを行へりといふが如き、尊王の微志の存するところ、明かにこの邊の消息によつて推知すべきにあ

東西學風の
差別

らずや、畫界を見れば菊池容齋の如きまた同一の思想より出でて歴史畫を作り、殊に好んで蒙古襲來もしくは南北朝時代における忠臣義士の事蹟を描く。かくては余は翻つて當時の國學を説かざるべからず。

前期以來、文化の盛衰處を更へて、京坂は漸く振はず、殊に京都公卿の窮厄は言葉も及ばぬばかり、その全體の供料を擧げて、なほ中大名一人の石高に過ぎず、雲の上人の名はゆかしながら、扇の骨つくり、楊枝けづりのみじめさよ、されば寶曆年中すてに不平の聲はかうじて竹内式部の事件も破裂したるに、何ぞ關東の地の悠々たるや、鴛鴦池塘に眠り、鯉魚急湍に躍る、周圍の人を化す眞に争ふべからざるものあり、江戸にありては、龜田鵬齋、大窪詩佛、菊池五山、谷文晁、酒井抱一の畫、書畫の會にこと寄せて、日夕宴飲に耽り、狩谷掖齋、黒川春村等、やゝ選を異にして學術に忠なるも、訓詁考證の末に拘々たるに、京にありては、歌人に小澤蘆庵、詩人に頼山陽など慷慨悲歌の士多し、勢かくの如くなれば、縣門の弟子も東西居るところによりて、おのづからその流派を分てり、眞淵は古道を明らむる國學者たると共に古風を詠ずる歌人なりしに、門人はしかく多而な

本居宣長

るを得ずして多くその一面を得、江戸にしては千蔭、春海後者を傳承して歌人として以て立てるに、伊勢にしては本居宣長前者を祖述して、いはゆる皇國の大道を大成す、もとより尊王愛國の士なり。

本居宣長は鈴の屋と稱す、伊勢松阪の人、醫を學ばむとして京に出て、契沖の書を読みて感ずるところありて古學に志し、郷里に歸りて後も深く自ら修む。遙かに縣居の盛名を聞いて、憧憬措かず、會眞淵が伊勢より畿内にけて巡遊することありしかば、すなはち旅宿を訪ひてその門に入る。時に宣長古事記註釋の志ある由を語りしに、眞淵大にこれを賛し、おのれもまたはやくよりその必要を認めしが、まづ着手せる萬葉の研究に日暮れ途遠からむとす、子なほ春秋に富みたれば、われに代りて、これを大成せよと慫慂激勵せしかば、こゝにその業に着手し、研鑽考覈、三十五歳といふに筆を起して、三十五年にして稿を脱せるもの、すなはち古事記傳四十八卷なり。實に契沖が萬葉集代匠記と並べて、古典研究の最大著述と稱せらる。

宣長の學說

宣長は神代ながらの大道を發揮せむとしたる人にして、古事記傳の大著もこ

れが闡明の津梁たらむが爲なりき。その説を概括すれば、曰く、蓋し神道といひて別に存するものにあらず、たゞ神代の神々の行藏を尋ねて、その跡を祖述するところにこれを見る、神代の歴史は今日の思想を以てしては理解し難きこと多し、淺薄なる人智を以て天地と共に大なる神意を量るべくもあらざればなり、われらは唯仰いでこれを信ずれば足る、強ひてこれを解釋せむとするが如きは、儒學者の陥りやすき習癖なり、わが國はすでに儒學の爲に誤られて、國家惑亂し、人心墮落せり、上古は然らず、貴賤おしなべて天つ日嗣の大御心を心として、大詔畏みつかへ奉り、至らぬ限もなき大御惠の光にかくれて、各、その祖神を齋き敬ひ、その身の分をつくして誠を行へば、浦安の國かぎりも知らず安かなりしなり、さらばまた今もこの古に歸りて、おのづからなる神の道を行はずやと、かくの如くにして、宣長は眞淵に比するに、更に一步を進めて、理性の知るべからざるところは、すなはち信仰によるの外なしとし、この點において學術的研究を離れて、宗教的範圍に入れるが如き觀あり、されどなほ二者の性質を考ふるに、いづれも眞摯なる學者の所説にして、熱烈なる宗教家の所爲にあ

國學の活動

らず、眞淵には獨斷なる僻説往々にして存せしが、敬虔なる態度に至りては眞に敬服するに堪へざるものあり、その古書に對するや、博引旁證盡さざるなく、具さに諸説の異同を辯じ、これを基礎とし、これを歸納して、始めて自家の結論に達す。故にその爲すところ極めて迂遠なるが如きも、論據一たび立たば堅實なること盤石の如く、加ふるに識見超凡、洵に一代の大家たるに耻ぢざりき。宣長の名すてに、奥羽九州の果にまで謙き、來りて就學するもの甚だ多く、徒らに高く標置せる公卿のまた渠が在京を期としてその講座に列するもの少からず、門下の秀才許多ありしが、わけて古道の眞意を紹述するに力ありしは、平田篤胤を主位に推す。篤胤は出羽の人、學問該博ならざるも、事に當りて剛毅果斷なり、いまだ刺を通ぜざるに先だちて宣長は歿せしかど、深くその學説を喜びて、欽仰措かず、先師歿後の門下生として、一身を提げて古道の宣傳に盡す。余はこゝに始めて古道の宣傳といふ、然り、宣長はむしろ學問としてこれを究むるに過ぎざりしに、篤胤は更に進んで敬神祭祀の式をも定め、以て從來儒佛二教の影響多かりし舊神道を排斥して、別に平田派の神道を起し、従つてまた國

民が覺醒一番、二千年來、萬般の事物の上に被り來れる外來の文教の壓迫を一掃せざるべからざることを大聲疾呼して止まざりき。かくの如くにして果して國民の自覺心は喚起せられ煽動せられ、上古王政の盛況は渠等が目睫の間に現じ來りて、こゝに盛に勤王愛國の論は沸き、恰も外國交渉の漸く繁きに伴ひて、更に攘夷の説は燃え出でぬ。げにも明治の革新は百年の昔すでに學者の夢裡に往來したるものにして、これを先にしては水戸學の唱道あり、これを後にしては國學の主張あり、維新前後の志士が行動はこれに養はれて出て來れりといふも不可なることなし、もとより志士のうちには國學者も多かりしなり。



明治の世

大化の改新
と明治の維新

明治の維新は古來未曾有の大變革なり。これよりさきわが國の歴史の上、政治の上、はた社會の上の變革と稱すべきもの、太古にして大化の改新あり、中世にして文治の幕府創立あり、近世にしては則ちまた慶長の江戸開府あり、いづれもわが明治の變動に比するに足るが如くなれど、具さに比較し來れば、その間また大に事態の異なるものなくんばあらず。江戸幕府の樹立を見よ、この時にも紛糾極なき百年の大亂は收まりたり、塗炭の苦を嘗めし天下の民衆は、これより生業に安んじ、枕を高うして眠るを得たりといへども、これを外にして政治もしくは社會の組織に如何なる根本的改造か施されけむ、これ等の點において家康がむしろ頼朝の先例に倣へるものなりしは、すでに前章に述べたるが如し。さらばこの標範と仰がれし鎌倉の開府はいかに、この時にしも政治の中心は始めて京を出でて關東に遷り、公卿の手を離れて武士の料理すると

變なりしなりされどこの勤王論者も、幕府を以て直接當面の敵とせる間こそ、その開港説に對して鎖港主義を持するの要を見たれ、さて王政一新、海内一統の曉となりては、その必要もなく、且や當時の世界の情勢に照して、通商互市の避くべからざるは、蘭學者輩ならぬまでも、弘く世人の間に知られて、漸く天下の輿論となれり、さればよし開港貿易や、その初、幕府が窮策に出でたる措置なりとすとも、新政府代りてまた敢て改むるに及ばず、むしろある期間を過ぎては、舉國一致、この方針によりて全力を傾け、西歐文物の輸入これより一時に盛にして、新しき國家の新しき文明はこれを模範とし、これを融合し、これを渾化して成れるを見たり。あはれ、當時の人頑迷にして悟らず、蝸牛井蛙とみづからその門戸を閉ぢて、猫額大の桃源境裡に一時の偷安を續けたらましかば、——想ひ見るにだに戰慄を禁ぜず。

日本固有の精神を發揮せむとする國學者流の國粹保存説と、開港貿易によりて大に西洋文化を輸入せむとする洋化説とは、とにかくに維新を契點として一時相一致し、相提携せるに似たり、されど二者はもと尊王論と佐幕説とが兩

國粹説と洋化説

端にありて相對峙せるが如く、全然その主義において相反す。換言すれば、その極端に奔れるものは、一は頑固なる保守説、一は猛烈なる進取説にして、維新後に至りてもなほその軋轢消長の跡はあらゆる方面においてこれあり。明治聖代の歴史といふも、畢竟その一方がいかにしてよく國粹を發揮するを得たるか、他の一方がいかにして泰西文物を傳來し得たるか、はたこれが結果として、全くその性質を異にせる東西兩洋の文明がいかにこの絶東の島帝國において混化せられ、融合せられたるかの答案に外ならず。かくてこの二主義の合離盛衰の見地よりして、大體に區劃するに、明治維新後の舞臺は凡そ十年毎に一線を引くべきに似たり。即ち維新成就の日より西南の役までが一期、次に十八年乃至二十年のころほひに歐化主義がその絶巔に達するまでが一期、日清戰爭まではまた一期、されば今の時はその後を承けたる最後の一期の道程もしくは終末に際するか、とはいへ前後通算するも僅々四十年のこと、一々章を設けて論ぜむもことごとくしと思へば、以下一括して大概を敘せむ。

維新の改革

維新後の革新は社會のあらゆる方面と事物とに及ぶ、政治の上に幕府を廢して王政を復古し、やゝ後れて立憲の制を取りしは更にいはず、官制の上にも幾度か變更あり、そのはじめ藩に代へて縣を置き、地價を定めて租税の法を立て、さて士族の家祿を奉還せしめて、國民皆兵の令を布けるなど、舉げ來らば頁を重ねてなほ足らざるべし、わけても階級打破の一事は新舊變動における著しきが中の著しき特色にして、貴族驕從の制はこれより軽く、公卿は齒を涅め、眉を剃ることをせず、庶民僧侶もひとしく氏を稱し、佩刀禁ぜられ、散髮奨められ、華士族も互に婚嫁するを得れば、穢多非人も平民の格、人身賣買はもとより昔日の語草となりて、騎馬に鞭てる平民の得々たるを見よ、かくの如くにして華族と士族と平民と名は三様に存すれど、國民としての權利は同一に傾きて、決して従來の如き差等なく、個人々々はおのがむき／＼目的を定め、職業に就き、才によりては青雲に駕するも難き業にあらずなりぬ。こゝに至りて平等自山の福音は日本の社會を風靡したりといふべし。

保守的暴動

も世間往々にして急激の革新を喜ばず、頑冥固陋の舊説を盾として、光榮ある新政府の施設を破壊せむとするものあり、維新頭初十年の間はむしろこの種の暴動多きに驚かむとす。見よ、要路の謀臣は路上に殞されたり、幕府再興の舉は所々に企てられたり、舊藩主が東京に居を構ふるは累代相結べる領民を乗つるものとして一揆を起せるものあり、四民平等の制は正に平民を以て穢多と同一視せむとするものとして憤慨せるものあり、兵制の改革に反抗し、特に徵兵の告諭における血税の文字に拘泥して、政府のまのあたりに人民の血液を搾取するにあらざるかを恐れたるが如きは、今日より見れば何たる滑稽ぞや、その他、學校の廢止、太陰曆の復興を主張して起れるなど、暴動の種類極めて多けれども、要するに前代の因循姑息なる近眼を以て現代に對する恐怖と、過去追慕の念とが、相倚り相扶けて構成せる悲喜劇にして、及びがたき脚色と演技とは後人の意想の外にあるもの少からず。

かゝる時代なれば、維新の實現も十年の昔と過ぐれど、なほ精神的文明の活躍するものあるを見ず、たゞ物質的文明に至りては、野にあると朝にあるとに論

物質的事業の進歩

なく、國民擧つて一意その發達に腐心すれば、早くも注目すべき成果を得たり。蓋し物質的事物はこれを精神的事物に比するに、遙かに皮相的にして、直ちに人目につき易ければ、彼我雲泥も管ならざるこの方面の差異のまづかれ等を驚倒せしめたるも、故ありといふべし。かくて電信通じ、郵便開け、瓦斯燈も點けば、電燈も照る、五十三次に沿うて布かれたる鐵路は二旬の行程を一日に縮め、遠州洋に白扇倒懸の景を賞するはその昔膽を冷しし黒船の上と知らずや、牛肉に舌鼓うち鳴らすもの、大驚惜しげもなく刈り落して、羅紗のズボンに濶歩するもの、千態萬狀なる衣食住の新様は、みなこれ物質的事物の輸入に伴へる現象にして、洋風流行の盛なる、時人もまたみづから意外の感に打たれしなるべく、五七年が程に日本の社會は天地轉覆しぬとは、屢、余輩の耳にせる老人の繰言なりき。

わが文藝の一たび維新の大浪に攫はれて、爾後久しく暗黒の中に沈淪せりしは、偏に國民がこの心靈的ならぬ事物の改善に忙殺せられて、また他を顧みるの餘裕なかりしが爲にして、一世の趣味性の墮落、墮落といはむよりはむしろ

前代文藝の破壊

地を掃へること、戰國の世もまたかくの如くなりしかと覺ゆるばかりなり、神佛の分離に伴ひて佛寺の存廢露よりもはかなく、寺々の山緒ある寶物は頻々として賣られ、賣られむとしてしかも買ふものなく、焼かれむとして僅かに傳はるを得たるが如きは、都鄙にその例多かりき。もしそれ貴重なる典籍書冊の散佚したるもの夥しかりしは、また推察するに餘あり、さりとはまた慘ならずや。泰西文明に眩惑せる國民の傾向はよくかくまでの破壊を敢てしたり、敢てしたりしといへども、これに伴ふべき建設は成らず、余輩は今暫く文藝の上

に例を取りたり、されど文藝のことにのみならず、倫理然り、宗教然り、形而上の事物悉くみな然り。

第一期の文學

明治第一期の文學界には殆ど見るに足るものなし、強ひてその人を求むれば、江戸時代の戯作者の流を汲める假名垣魯文を推すべし、魯文滑稽の筆を弄して西洋膝栗毛等を作る。この書はいふまでもなく一九の東海道中膝栗毛に倣へるもの、舞臺を西洋に取りて、西洋文明國の世相を描出せむと試みたるは、稍、注意すべきが如くなれど、一篇の主眼たる滑稽戲謔多くは沒趣味にして、駄洒

落の域を距ること甚だ遠からず、その價值極めて乏しきものとす。脚本界には河竹默阿彌あり、ひとり斯道に聲譽を恣にすといへども、その思想を窺へば依然として舊時代のものたるのみ。このほか張三李四の文人者輩名を傳ふるもの必ずしも少からずといへども、江戸文學をばいや下様に引き下せる成島柳北が戯文戯詩壇の泰斗として、一代に重きをなしたるが如きを思へば、他は多くいはずして可なり。概括して論ずるに、この時代の作品は陳腐の思想を糜爛せる前代の形式に盛れるものにして、いかにひいきめに見ても、いまだ以て明治新文學の先蹤を示すものとはいひ難からむ。

精神的事業の不振やそれかくの如し、さるが中に閉却すべからざるは一般知識の普及なるべし。すでに江戸時代はその以前に見るを得ざりし學問興隆の時代にして、上下貴賤ともにその修得に心を傾けたりしが、なほ百姓町人の間にはこれが無用を唱ふるものなきにあらざりき。然るに明治の世、學制の布かるゝに及びては、男女六歳を學齡として必ず學校に上るの義務あり、津々浦々いづこの山の奥とても呬唔の聲を聞かざるはなし。當時この學校教育と相俟

一般知識の
進歩

ちて愈、國民の知識を啓發する力ありしは、活版の傳播とこれに伴へる新聞紙の發達となり。新聞紙の萌芽は既に文久年間にこれありしが、明治初年に至りては、政府がその日程を公布せむが爲に世に出せる太政官日誌は即ち今の官報の基礎を作り、中外新聞、江湖新聞は民間新聞紙の曉鐘となり、これより續々新聞紙の發刊あり。四年、西洋紙及び西洋活版術の用ひらるゝに至りしは、正にこの事業の進歩に一期を劃するものにして、その影響は決して單に新聞紙發展の上のみに止まらざりき。およそ印刷術の一國の文運に至大の關係あるは今更いふにしも及ばぬことにして、江戸時代の文學が前古未聞の盛を致せりといふも、その主因の一はまた確かにこの術の進歩にあるべし。活字版は、前にもいへるが如く、はやく江戸時代において試みられたることありき、されど幾ばくもなく、整版に勢を奪はれて、廣く行はるゝに至らざりしが、こゝに及びて洋式に則りて、大にその術を研究し、時事を最も迅速に報導すべき新聞紙と相呼應して、一大飛躍を遂げ、書籍の刊行せらるゝもの、また従つて日に相續ぎ、これらの新現象はやがて偉大なる明治文學を建設すべき基礎となれり。

新文明の鼓吹者

三田に慶應義塾を起せる福澤諭吉は學問の普及、社會の啓發に功績ある第一人なり、その教育に對する熱心と識見と、摯實の態度とは蓋し何人も及ぶ能はず。著述多きが中に世界國づくしは記憶に便ならむが爲に七五調もて歌ひ、記事の乾燥なる詩として多くいふに足らずといへども、讀誦一遍、泰西國情の勞瘁の間に映じ來るものあるは、いかに當代民衆の知識を増進するに力ありしぞ。その他西洋事情、學問のすゝめ等を著はして、専念、新文明の鼓吹に努めたるなど、時代の先覺者として國民を指導せる功勞長しへに没すべからず。わけて渠に記念すべきはその平明暢達の文體にして、こは決して不用意の間に生れず、自由を期する故に文語と口語との調和を計り、平易を尊ぶからに漢字をも節約し、以て従來行はれたる粗大誇張の漢文調を打破すると共に、精細緻密の思想を十分に貫徹するに足るべき一新文體を創めむとする奮勉努力に成り、わが明治の文章は渠によりて略、その形式を整へたりといふべし。さらば三田の福翁は文章史の上にも逸すべからざる近世の大手か。私塾を開いて洋學を教へたるもののうち、慶應義塾の福澤を除いては、同人社を建てたる中村正直

第一期の概括

を推すべし。正直はじめ昌平校に入りて漢學を學び、のち更に洋學を兼修して、スマイルスの西國立志編、西洋品行論等の譯あり、その意社會の改善、品性の修養にありしや疑を容れず。外に明治七年米國より歸朝して、同志社を京都に興し、耶蘇教主義を奉じて、育英の事業に献身せる新島襄あり。また得易からざるの高材にして、新文明の扶植はまた多大の援助をこの人に得たり。かくの如くにしてこの期間は純文學については特にいふべきこともなし。但、一方にかく十年依然たる舊時代の遺物を見るのみなりしと共に、他方にいまだ結果の穂に出でたるものこそなければ、その素質の漸く養はれ培はれつゝありしを知るべし。

歐化主義の一轉機

西南の役は、維新以來各地に續發せる暴動に比すべからざる、大變なりき。時は明治十年にあり、動亂の影響殆ど引いて全國に及び、人心の蕩搖甚しかりしが、この役は後の叛亂を醸さむとするものの懲戒となりて、城山の陥落と共にこの種の舉に出づるもの漸く跡を潜むるに至れり。そはいふまでもなく暴動の

大なりしに従ひて、國民の感動も大に、二世の豪傑西郷隆盛が聲望と戰術とを以てしても、官軍の威光は遂に秋毫も犯すべからざるものなるを了解したればなり。國家は靜謐に歸したり、封建の夢は覺めたり、こゝに至りて愈、その勢力を逞しうし來れるは、維新のかた一派の主張となれる歐化主義にして、西南戦争の終る頃より、嘗にかの國の物質的事業を輸入し來れるのみならず、更に進んでその政體制度をも移して以てわが國に行はむとする、急進的改革論者も著しくその數を増すを見たり。そも、隆盛が前に官を辭して郷國に歸りしは、あのれが發議せる征韓論の廟堂に容れられざりしが爲にして、憤懣は發して更に兵力に訴へられしなるが、共に袖を列ねて野に下れる土佐の板垣退助等は途を異にして、専ら言論によりて政府と勝敗を決せむとし、率先して民權自由を唱ふげにや。民權自由は當年の套語、これを標榜して起てる有志の徒は土佐を中心として、九州の端より東北の極に蔓り、自由温泉、自由煎餅、自由丸、自由亭など、さらでものものにまで一にこの珍らしき新語を冠らせて喜ぶに至りぬ。以て過激なる自由思想の時勢に投じたる一斑を推すべし。

急激なる政治論

かくて佛國の革命時代は時人が憧憬的となりぬ、渠等が理想的人物としいへば、ヴォルテール、ルッソ、さらすばモンテスキューと名ざししも當然の數。中江篤介、ルッソの民約論を譯して過激なる自由主義を唱道すれば、鳥尾得庵王法論を出してこれを破す、人權新説に保守の見を洩す加藤弘之あれば、天賦人權論にこれを反駁する馬場辰猪あり、喧々囂々として底止するところを知らざる一世の議論は、民權自由の問題ならざるはなし。明治初年以降、一に米國の功利主義によりて行動せる天下は、こゝに至りて全く佛國思想の空論によりて支配せらる。壯士となん呼べる遊食無類の徒は至る所に横行濶歩し、官吏の跋扈を見る時は、悲憤慷慨扼腕する、竹槍席旗て堂々と、一時に亡ぼす夢を見た、愉快々々などいへる、殺風景なる所謂壯士歌の普く民間に謠はれしに徴するも、一世の風潮は昭として眼のあたりにあり。思ふに當時の日本は、革命前後の佛國の如く、狂風時代の獨逸にも似たるかな。國民は誰彼となく政治運動に奔走して、文藝も單にその論議を盛るの器として用ひらる。十年の役後、新聞紙の必要が切實に世間に知らるゝと共に、その勢

政治小説の流行

力傾に上りて、發行部數の増加驚くべく、これが編輯に携はれる記者等は、國民の輿望を負うて、擧つて刻下の政治に容喙し、これに載する小説も維新前後における尊王攘夷二派の軋轢、佛國の革命運動、もしくは露國の虛無黨の陰謀などを材料として、殺氣勃々、腥風陰森、一括してこれを民權自山の論評に熱中するものと見るを妨げず、その文體は信屈蒼牙、むしろ生硬未熟なる漢文直譯體なり。當時最も噴々の名ありしは經國美談にして、著者を矢野龍溪とし、往昔希臘の聯邦が互に覇を争へる時、シーベスの名士エバミノンダスがペコピダスと協力して、國威を輝かしたる歴史的事實を敷衍す。その外、東海散史の佳人の奇遇、末廣鐵腸の雪中梅、須藤南翠の綠箋談の如き、いづれもこの政治的狂熱時代の影像にあらずして、何ぞや。さばれこれ等の著者はみな文學専門の士にあらず、寧ろ政論家として世に立てるものなれば、真正の藝術的批判の尺度を以てその述作の價值を云爲せむは或は酷なるべく、余輩もこゝに單に歴史的にその發生の山來を説きて止まむのみ。

西洋文學の

西洋小説の翻譯もこの十年代になりて漸く色めき立ちぬ。維新以降、泰西文物

翻譯

の輸入紹介せらるゝもの算なく、その色味は隨處に認められしかど、文學的作品の翻譯に至りてはひとり未だ現はれざりしに、國民の知識の進歩につれて、これもまた起れり。明治十二年に出版せられし花柳新話はこの新現象の急先鋒にして、原著はリットンのアーネスト、マルツラツアイス、譯者を織田純一郎といふ。これよりリットン及びヂスレーリを筆頭として、ユーゴーなども傳へらるゝに至りしかど、概していふに、これらの翻譯小説も多くは純文學の進歩に伴へる積極的產物にあらずして、炎々たる政論熱の副産物なり。すなはち當時、泰西政治社會の狀態に通じたる政客新聞記者等がかの國々における前人等輩の生活を欣慕し、渠等が政治的或は歴史的の述作を耽讀好愛せる結果、これをわが國に移植せるもの、蓋し十中の八九を占むべく、従うてまたかく翻譯せられし小説の原著者が政治の方面に名を顯はししもの多く、その著述の動機が等しく政治的傾向に出でたるもの少からざるはいはずともあるべきこととなるべし。この頃、別途を進める翻譯壇の一異彩は外山、山等が編輯せる新體詩抄なり、抄中、間々編者の自作もうち交れど、西詩を譯出せるもの大部分を

粗笨なる文辭

占め、とかくの議論はあれど、いはゆる新體詩の一體はこゝに始めてその存在を認めらるゝに至れりといふべし。

さりながら詩にもあれ、小説にもあれ、すべて翻譯に用ひられたる文辭は、なほ多くは他の創作品と同じく、粗笨蕪雜にして、歴史的價値を外にしては、させる長所ありとしも覺えず、新體詩は、俳句、短歌の小詩形を覆へして、大膽に奔放に七五の句を制限もなく、燕み、綴りて長篇を作り出せるもの、その形式上の苦心は、さることながら、用語生硬、格調いまだ雅麗ならず、散文に較べてよく幾何の詩趣ありといふを得るか、小説の文章に至りては、更に一層の甚しきを見る、滔々として粗雜なる漢文直譯體なり、もしくは馬琴一流の讀本口調なり、これらを以てして甚深微細なる人情の極致を寫さむことの難きは、更めて言ふを須ひず、當時蠶々たる翻譯家が、ちぼつかなくも文字をたどりて、原作に存する滋味の大半を失ひ、著者を辱しめて恬然たりしと併せて、好箇の笑柄たらずんば幸なり。

淺薄なる内容

以上は形式の論なるが、内容においてもまた賞讃的批評を加ふるを得ず。既に

容

いへるが如く、この時代の作物は、政府の壓制、志士の反撥など、政治社會の事情を以てその中心となすこと、その通有の特色なるが、なほ一考するに、かくの如きは、單に皮相を包む粉飾に過ぎずして、實は別にその内面に隠れて存するものあり、裏は表に反す、こゝに濃艶の美人あり、これに對する紅顔の才子ありて、綯繆纏綿たる情事の經緯、さながら春水以來の洒落本種ならずや。たゞ異なるところは、昨の藝者通人が今の壯士才女となれるのみ、恐ろしくも嚴めしき法廷の光景は一見觀客の膽を奪ひしかど、思へば袂をばやし、糞の濡れ場も同じ舞臺の芝居なりけり。

坪内逍遙

この時に當りて、隱然みづから文藝批評界の木鐸を以て任じつゝ、大旗一竿、小説神髓を真向に押し齧して、この腑甲斐なき文壇の傾向を一掃してむと進み出てしものを、坪内逍遙とす。逍遙これよりさきリットン、ライエンデー、シエトクスビーヤのシーザを譯出して、當時の政治的風潮に投ぜしが、今や翻譯昨非を悟りて、聲を勵まして、藝術が實用の奴隸たるべきものにあらざして、自體を目的として特立獨歩すべきを唱へ、政治の關係はいふまでもなし、またい

たぐ馬琴一流の勸懲主義を排して、作家はありの儘なる客觀的寫實によりて神妙の域に入るべしと主張す。所論今日より見れば固より備はれるものといふを得ざれども、時人の耳には警鐘の響を傳へたり。疾呼の反應はありき。筆硯に親しめる士は風を望んでその麾下に集まり、期年ならずして文壇は一時全くその寫實主義によりて占有せらるゝに至れり。而してこの主義をまづ創作の上に試みて、實例を天下に垂れしも、逍遙その人に外ならざりしは、いと興あることにして、作は即ち當世書生氣質なり。されど書生氣質は小説神髓の意見を體達せず、主人公たる青年男子は號して當代の標本的書生なりといへど、舊樣依然、また洒落本系統中の人物にして、僅かにその纏へる明治教育の新衣の人を領かしむるあるのみ。新小説の範たるに及ばざりしことまた遠いかな。とはいへ、一たびこの論とこの作と出て、維新以來の新空氣中に成長して江戸時代の作風に趣味を感ぜず、さりとて政治小説の乾枯淺薄なるに眼を覆へる人々が、雙手を舉げて歡迎の意を表せるはさもあるべきことにして、從來、小説としいへば一に閑人者流の戯作として、讀書界のこの方面のみには門外漢た

歐化主義の高潮

るを以て尊る得々たりしものも、こゝに始めてその價值を認め、そが高尙なる教養ある士人の讀物として決して耻かしからぬものなるを會得せしめたる功は大なりといふべし。とにかくにこの二書は文學史に一期を劃すべきわが小説界の指南車なり、大恩人なり、一步を進めて明治文學の啓發者といふも強ち過褒の辭にあらざるべし。

明治十年代は國民を擧げて西洋文化に心酔せる時なりけり。この風潮は十七八年頃よりわけて甚しく、逍遙の小説論の如きも、實はかの地の藝術論を假り來りて我に應用せるものにして、所謂言文一致體が漸く小説界に勢力を占め來れるは特に注意すべき現象なり。羅馬字採用は盛に唱道せられ、英語は國民教育の基礎とせられんとす。中には人種改良と稱して東西人の雜婚を懲誼するものさへあり。何事も西洋ならては埒あかず、二十年、假裝舞踏會を總理大臣伊藤博文が主催の下に鹿鳴館に開ける時は、實にこの歐化熱の最高潮に達せる時なりき。維新以來の時潮に伴ひて新教育の修得に志せる人々の素養はたこの時に成り、今よりはその修得せるところを提げて、直ちに實地に行はむと

新文學の勃興

するものも多々これあり西洋文明の紹介者たる國民の友が雜誌界の明星として呱呱の聲を擧げしも正にこの二十年の春、主筆たりし徳富蘇峰は別に新日本の青年と題する一書を公にして、現代の青年の、須らく歴史の束縛を脱して、獨立自重の氣象を養ひ、瀛西の道義思想を輸入すると同時に、國家を衰朽せる老人輩より解放して、根本的に具體的に新日本の經營に當らざるべからざるを呼號す。これらはいづれか新來文明の感化なり、影響ならずとせむ。されど時勢は轉じて止まず、その後及びてもこの趨勢はいまだ力なきに至らずといへども、西洋謳歌の聲は正に二十年に極まり、これより新しき反動——復古主義——の氣運はまた展開し來れり。

明治二十年代は純文學勃興の新時代なり、十八年に出でし逍遙の書生氣質は固より作風廻轉の樞軸なりしかど、作そのものに大なる價值あるにあらず、ついで同じ人の妹背鏡あり、こたびは人情世態の表裏を發いてや、細に入り、靴一重は脱がれたれども、なほ直ちに痒きを搔くこゝちはせざりしに、氣凝ると

紅葉と露伴

ころ、霧と布き霞とたなびかずんば止まず、こゝに至りて一篇の傑作浮雲は衆人翹望の對象として現はれたり、浮雲の作者を長谷川二葉亭とす、その文章は、對話のみならず、地の文をもすべて口語體を以て行り、むしろ平凡なるが如き家庭の波瀾を捉へて、心ゆくほどの摸寫を試む。洵にこれ當代小説の逸品にして、小説神髓の主張はこの作によりてほゞ遺憾なく實現せられたる觀あり、余輩はさきに書生氣質を論じて、エッセイイキヤク劃期の作に擬せむとせしが、こゝに至りて更にこれを浮雲に代へ、以て批評の小説神髓と並べて明治文學變遷史上の二大述作と斷ずべし。この頃、純文學に熱心なる一團の青年輩の自作集を公刊し來りて、嶄然頭角を現はせるものあり、これを硯友社同人とし、集を我樂多文庫と名づく。この前後、書齋雜誌の發兌一時の風をなし、雜誌のみにつきていふも、廣津柳浪の大和錦あり、新たに硯友社を脱せる山田美妙が都の花あり、森鷗外を主筆として、西歐文學の移植に力めたる柵草紙も出で、第一編に色懺悔を載せたる新著百種も生れ、今に連綴せる新小説もその初刊はこの頃にありき。當時の新進小説家中の三雄を指して尾崎紅葉、幸田露伴といふに、何人も異論

なかるべし。紅葉は色懺悔のかたその作出づるとして當らざるなく、露伴風流佛に名さだまりて、五重塔に愈、高し。二者の特色を比較すれば、彼は筆致優艶にして、濃かなる婦女子の情を寫すに巧に、此は好んで偏僻の人物を描へ、文辭また宕逸遒勁の趣あり、而して前者はその筆の圓熟するに従ひて、愈、活社會、實世間の寫實に赴き、後者はあくまで理想に執着して、自己が本領の發揮に力む、一は客觀的にして、一は主觀的なり。紅葉の二人を措きては、山田美妙、櫻庭篁村、齋藤綠雨等の名を記すべし。逍遙の細君、鷗外の舞姫及びうたかたの記の如きも頻に世評に上りしが、この二人はむしろ批評家として盛名あり、没理想論における二家の論戰は當代文壇の偉觀なりき。なほ一人の女流天才者あるを忘るべからず、即ち樋口一葉にして、女らしく、やさしく、人情の底を穿ちたるその作風は、他の作家輩に見がたきこの人の長所にして、彗星の如く去來せし浮世二十五春秋、文壇五星霜の短生涯、はかなくもまた花々しかりけり。

そもこの時代にかくの如き文學の奮運を迎へたるは、一面社會の事情に伴へるなり。二十二年に憲法の發布せられ、二十三年に年來の宿論として久し

復古主義の活動

古典の研究

く期待せられし帝國議會の開かるゝなど、國家の前途は希望洋々として春の海の如く、一時政治熱に狂奔せる國民の感情いつしか柔らぎて、その注意は新たに學問文藝に向へり。而してこれらは國民の友、柵草紙などのあるありて、直接間接に外風の感化を被りたること勿論なるが、その勢力は十年代に比すべくもあらず。雜誌日本人が旨と泰西文明の缺陷を指摘して復古主義を唱道せるが如き、また以て時運の變を卜するに足るべし。かくて井上毅が文部大臣の地位にありて國語教育を獎勵せし前後より、古典の研究俄然として起り、西洋崇拜の思想は幾ばくもなくして國粹保存主義に壓倒せられたんぬ。

時運は争ふべからざりき。頻々として出づる書籍は日本文學全書を初として、古典文學の複刊極めて多く、古代の研究着々歩を進めて、奈良、平安兩朝の文物も釋然として闡明せらる。否、上代文明の寶藏が開かれしのみならず、近世文藝の考覈も、緒に就けり。明治初年にありてはその文學江戸時代を繼承すといふも、僅かにその下半期における馬琴、種彦、春水等を云爲するに過ぎざりしに、こゝに至りて更に浜りて西鶴の小説、近松の戯曲に及び、二百年足る足らずの

正岡子規

古にかくまでの雄篇傑作が存せるを世人の知らず顔にうち過ぎしことの、今更に驚かれぬ。殊に紅露の二家はいたく西鶴の筆致を喜び、後にこそあのく自家獨得の長所によりて異色を發揮するに至りしかど、一時は進んでこれが模倣を試みたるなり。もしそれ一葉の甚しき西鶴崇拜家にして、その感化を受けること夥しかりしは、その作物に接するものの熟知するところなるべし。これのみにあらず、正岡子規が俳句の創作批評の新見も同一風潮の上に坐せる注意すべき一事象にして、これまで永く芭蕉を以て斯道の神と仰ぎつゝ、一言一句その旨に違はむことを恐れし月並調の俳壇は、渠が俳風——稱して曰本派といふ——の樹立と共に千仞の崖下に墜されぬ。子規の眼識は時流を超越す、刻苦勉勵、渠がその誤らざる批判力によりて芭蕉の句集を翫味して、是を是とし、非を非とし、後には更に蕪村の作物の研究に及びて、あらゆる長所を収め、己が藥籠に投ぜしは、なほ人の記憶に新なるところなるべし。子規は實に才幹あり、されど渠にしてもし歴史的研究を積むことかくの如きに及ばざれば、なほよく明治俳壇の大人物として、元祿の芭蕉、天明の蕪村と對伍せらる

欠

MISSING

心理小説

後れず、あらゆる方面に彼の長所を取りて我に融化せむと試むれば、文學的作品の翻譯も前日の杜撰なるものの比にあらず、精密なるもの、眞摯なるもの相續いて生じ、進んではその精神思想の色味をもわが創作に應用せんとするに至れり。

二十七八年の戰役は國家の財帑を費すこと夥しく、その初頭に當りては勝負の決いまだ何れにありとも信じ難ければ、諸般の事業すべて頓挫の姿ありき。されど勝算すてに立ちては反動の活氣を生じ、二十八年の内國博覽會に美術が一代の盛運を示せるが如く、文學もまた非常の進境ありしなり。かくと見て二十六七年の交、一たび癡刊するの止むを得ざるに至りし雜誌の復興するあり、新たに起れるものその數さらに多く、従つて新進作家の名を傳へられたるもの少しとせず。小説の内容も變れり、人情の曲折を映射せしむる心理的描寫の傾向は、これまでとても認められざるにあらざりしが、その淺々しく甘たるき情事のみを以てしては、新社會の思潮と相容るべきにあらず。こゝにおいてか轉じて社會の暗黒面に筆を着け、觀察は走つて日進月歩の競争場裡に敗北

せる人々の悲惨の境遇に及び、或は肉體的或は精神的なる不具者の上に及びて、いはゆる心理小説もしくは悲惨小説と稱せらるゝ新主張は成れり。まづこの新傾向を代表せるものは廣津柳浪、泉鏡花等にして、既に老成の域に達せる紅葉もこれらに刺戟せられて多情多恨を出せり。この作や場中の人物多からず、事件の變化も極めて少けれども、凜然たる長篇、微妙なる人情の推移を窺して掌を指すが如し。その口語體もまことに圓熟して、以て廣く世の文範となれり。蓋しこの一篇は紅葉一代の傑作として推重するに足るものなり。ついで金色夜叉を著はし、失戀の極、貪婪無殘の高利貸となれる青年を主人公として最も深刻の趣致を極めむとせしが、易和洒脱の性は冷酷悽慘の場を描くに適せず、矛盾撞着、その筆の竟に人生の暗黒方面を描くに堪へざるを曝露したり。文章はた口語體より文語體に歸り、技巧を弄して綺羅に過ぎ、駢儷對照の典型中に固定せる嫌なきにあらず。これを多情多恨に比べて著しき遜色あり、作者が苦心と經營とは水泡に歸し、自らまた自己の短所に想到したりけむ。氣沮みて筆漸く動かず、斷續常なく、完結を告ぐるに至らずして紅葉は逝けり。

思想界と批評界

當時、思想界の雄を以て目せられしは大西祝と清澤滿之となり、明治の哲學明治の宗教をいふものは必ずこの二人の名を逸すべからず。思想の沈厚にして深邃なるは、固よりこれに及ばざれども、文藻富瞻にして威力あり、評壇の一方に睥睨して、常に問題の提供者となり、青年が崇拜の的となりしもの、高山樗牛に如くはなし。樗牛謂へらく、凡そ文藝に携はるものは時代精神のあるところを察せざるべからず、苟くも現代の思潮に觸れざるものは文學として取るに足らずと。これより延いて日本固有の國民性を發揮するの必要を唱へ、いはゆる日本主義を唱道せる一團の人々の中に加はり、聲を大にして呼號す。されどその後ニイチエを祖述してその超人説を鼓吹するものあるに至りて、渠の思想も漸く推移して、或は美的生活を説き、或は平清盛、日蓮上人を憧憬せる論文を出して、個人の勢力の最も重んずべきを説きたり。樗牛の後、網島梁川あり、眞摯なる見神の信仰を披瀝するに流麗なる文章を以てし、聲名一時に喧傳せり。惜しいかな、これら四人共に早く歿して、思想界及び批評界のうたゝ落莫たること。

寫實小説

創作の風尚も批評の傾向と相並びて進歩し、寫實主義、自然主義を抱持するもの漸く勢を得たり、その主張するところ、小説は實世間の人物をありのままに丁寧筆寫すれば則ち足るといふにあり、小杉天外、小栗風葉等まづこの一派の主領として仰がれぬ。顧みれば二十年代の小説はその以前に比ぶれば頗る進境ありといへど、なほ習慣に拘はり歴史に執して、直下に現在の人生に觸れず、固より人物も舞臺も材を現代の社會に取りたりとはいへど、なほ口にくく公衆の注意より遠ざかりゆく賤妓蕩子を寫すもの多かりしなり。然るに今や躍進一番、世人が一般に痛切に感じ來れる社會の動搖、新舊思想の衝突に基ける家庭の波瀾等に向つて、觀察の眼を鋭くするに至れり。女子教育は急速にその量において進歩し、女學生は新たに社會の一勢力となれば、この新現象もまたおのづから作物の上に現はれざるを得ず。殊に當今の社會事情に關聯して、社會主義を敷衍せる一種の傾向小説の出でたるが如きは、また見逃すべからざる文壇の現象ならずんばあらず。

文學はなほ種々の方面において進歩せり。短歌も同じ風潮に隨逐し、從來の典

歌壇の形勢

劇界の形勢

型を擺脫して清新の作を産出し、新體詩も二十七八年の交は優美典雅なる古調を用ひて、誦すべきものなきにはあらざりしかど、その内容はいはゆる朦朧體の名に背かずして、未だ社會の期待を充す能はざりき。三十年を越えては、泰西思想の融化によりて、形式の完備よりも内容の充實に努め、或は象徴主義を取るといひ、或は自然主義に依るといひ、一部の青年者間に耽讀せらるれど、文藝の歴史よりいへば、前代の趣味を失ひて、今人の作風いまだ成らず、その前途はなほ遼遠なるべし。俳句は、子規が一たびその旗幟を明かにしてより、文壇に重視せられ、隱然として一方の勢力たりしが、あはれこの文壇の勇將は早く大患を得て奮闘數年、なほ春秋に富める身を以て、既成の功と無限の恨とを残して逝きぬ。將星墜ちて形勢また振はず、隨從の士漸く倦怠の色あり、子規が晩年の事業たる萬葉調の短歌も寫生文も、將來いかばかりの發展を見るべきか、疑なきを得ず。

劇壇の消息はといふに、三十六七年の交、老練なる名優多く世を謝して、その後を承くべきものいまだ出でざれば、技藝の妙味を以て脚本の缺乏を糊塗する

ことも難くなりて、舊派の沈滞殊に甚し。これに反して新派の演劇は年を経るに従ひて練磨の功を積み、漸く世に重んぜらるゝに至れり。彼は從來の聲價を墜さざらむとし、此は新來の機運に乗じて、互に自派の向上を希望すれば、競争はやがて避くべからざる結果なり。かく新舊兩劇相對して勢を張らんとするにつけて、第一の要求はいふまでもなく新脚本の製作なり。果して多少の作家の或は創作を試み、或は泰西脚本の移植によりて、これが供給に勵めるあれど、梨園の情實と俳優の專恣とはいまだ名家をして自由にこの道に手腕を揮はしむるに至らず。されど機運の進歩は固より争ふべからず、逍遙の舊作もこれに始めて舞臺に上れり。逍遙はなほ樂劇新曲浦島を作り、これと共に新樂劇論を著はして、今後わが國に行はるべき劇は振事を主とする樂劇ならざるべからざるを主張せり。恰もこれ書生氣質と小説神髓とを併せて世に問へると同一手段なるが、かれらが文學界に一時期を劃せるが如く、これらもまた劇界の警鐘たるべきか、その勢力の及ぶところの如何は暫く將來を待つべし。とにかくその言説は常に一世に先だち、社會公衆を誘導啓發すること前後二十年

最近の小説界

今なほ演劇の改善に腐心して老の至るを知らざるの概あるは、明治文壇にありて異數とすべく、功勞また第一と稱すべし。かくの如く文學のいづれの方面も進歩を見ざるなきが中に、際だちて目ざましきは小説の發展なり。小説が現代世界の文壇の流行物たるはいふまでもなく、明治文學の粹もまた實に此にありて、一時、新體詩俳句等に名を得たるものも、轉じてこの方面に筆を染むるもの尠からず。げにや、昨今小説の作家と稱すべきもの數ふるに堪へず、さるが中に嶄然として群衆に傑出せるものは夏目漱石と國木田獨歩とにして、二人はその作風においてまた好個の對照を示す。漱石は英文學の造詣極めて深く、また俳句に堪能に、中年以後に至りて小説を作る、初は滑稽諷刺を事とし、漸く嚴肅の境に出入して、一作は一作より面目を新たにせむと苦心せるさま、作物の上に歴然たり。蕭散なり、冲澹なり、洒脫なる俳と禪との趣味と精緻なる英文學の風尚と兩々相扶けて、その筆致をして清新にしかも細緻ならしむ。人情の描寫は寧ろ迂にして、ある觀念を捕へ來つてこれを具體的に現はさむとし、數、説明的敘述に趨る傾あり。獨歩の作は多く短

籍なり、迂餘曲折の詞華言葉は却つて感想の流露を妨ぐとなし、故らにこれを避けて、慕進して自然の人生を衝かむとす。従うてその文簡短直截にして、些の修飾なく、漱石が詞藻を烹鍊すると正反對の位置を占む。蓋し渠の小説は直接に現代の思想に觸れ、露骨に人間の性情を描きて、以て讀者の眼前に最も簡明なる社會の縮寫圖を展開すると共に、かれらをして人生の秘密の一部を掴み得たるの感あらしめんと欲するものなり。この人文壇に名を得てよりこれに倣ふもの俄に多く、批評と作品と相待ちて大膽自由の描寫を叫び、現代文壇の流行はいはゆる自然主義に止めたり。

國民の使命

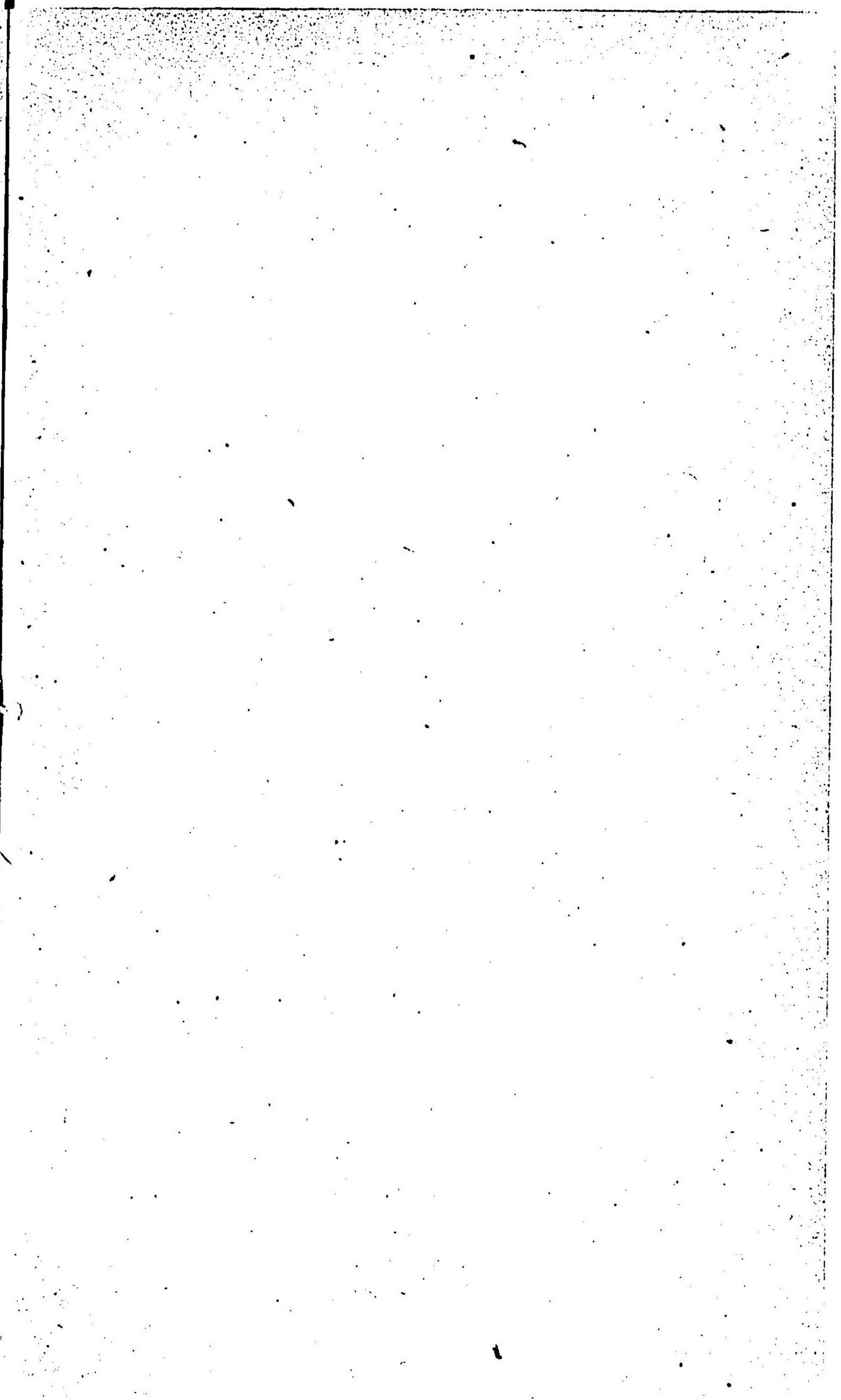
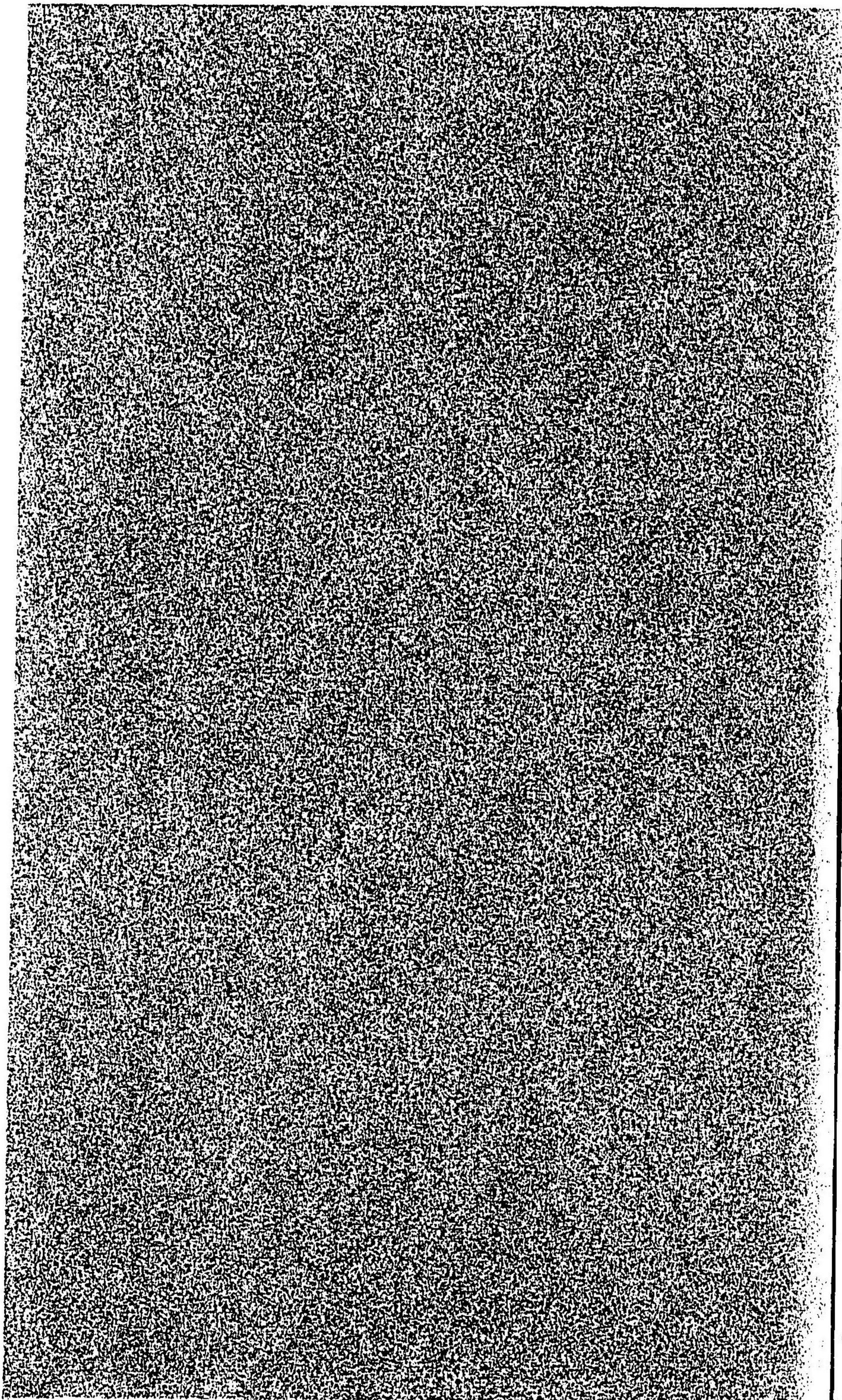
この文壇の事情は、説き來つて日露戦争の後にまで及べるものなり。三十七八年の戦役はわが國曠古未前の大戦、敵國とせし露西亞が歐洲の大國なりしだけに、わが收めたる戦勝は殊にめざましく、國民の自覺がこれより一層の強さを加ふると共に、列國環視の眼は益々睜らる。從來かれらはわが島帝國を極東の一小國として、動もすれば侮慢の氣色ありしが、戦後の今日に至りては形勢全く一變す。ある最近の辭書に列強なる條下に日本を擧げて千九百六年を以て

これに伍すといへり。かゝれば日本國民の飛躍は刻下の世界の大問題となり、諸國の學者、政治家等種々の方面より觀察を下して、この歴史上の奇蹟を闡明むとす。われもまた固より自己の研究を怠るものにあらず、或は武士道を以て國民の精華とするものあり、或は西洋の個人主義に對して家族主義を唱ふるものあり、とにかく東西兩洋の關係がこの役ののち益々緊密の度を加へ來れるは争ふべからざる事實にして、將來この兩洋の文明は互にその長所を失ふことなくして、圓滿渾一に融合せらるべきか、はたかくの如きは一場の空想に止まりて永遠に不可能のことに屬すべきか、これ等の問題を解決すべき使命を荷へるものは即ち世界における最舊文明國の一國民にして、また世界における最新文明國の一國民たるわれら日本人を描きて、他にあることなし。われら日本人はみづから奮つてこの使命を果さむが爲に、古今東西の文化の粹を蒐めて打つて以て一丸とし、これを悠久にまた無限大に向上進歩せしめむとするものなり。文藝發展の徑路もこの國運と伴ひて年と共に新に年と共に熾なるものあるべし、また多望なるかな。

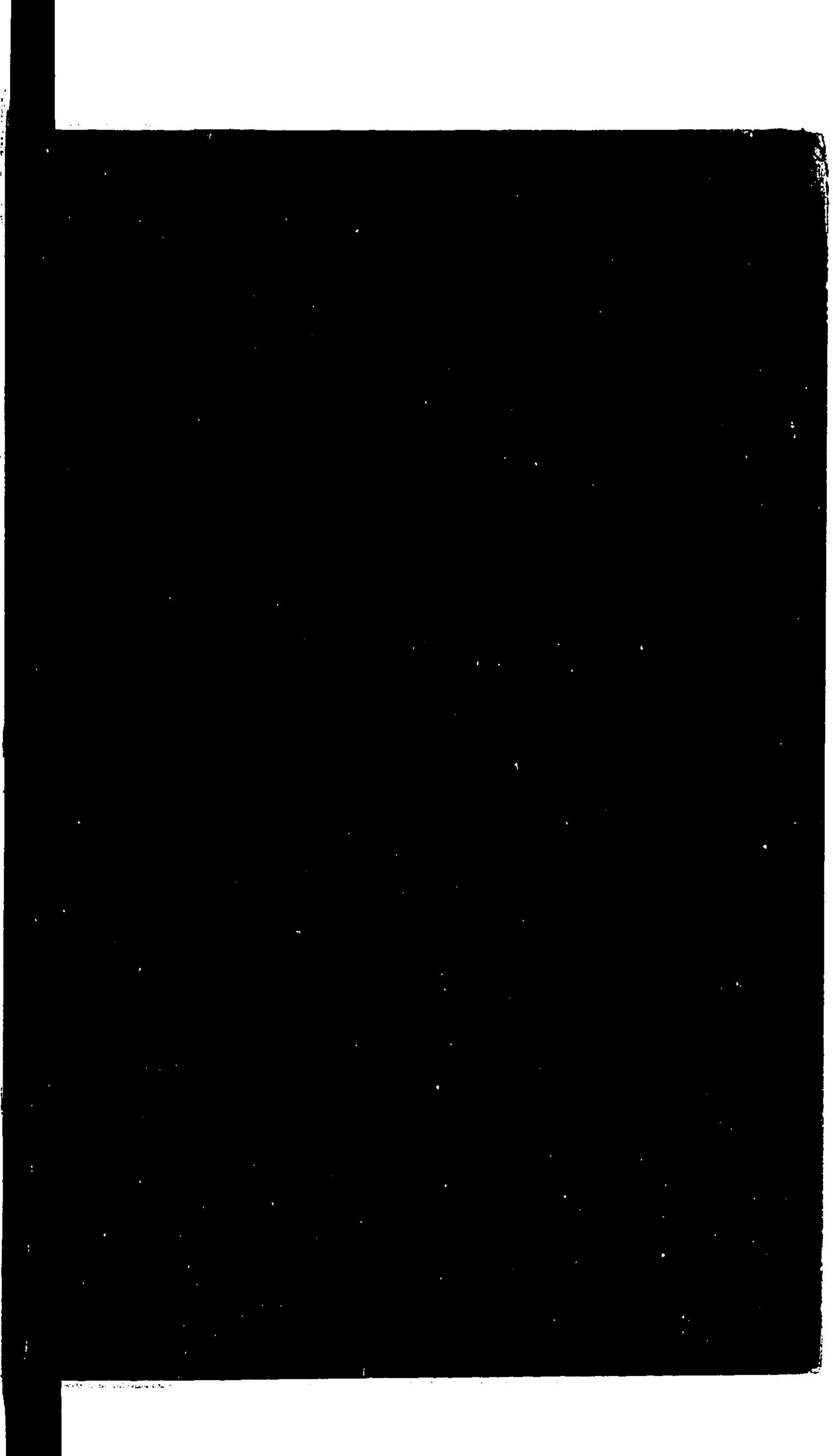
明治の世

國文學史講話 終

五五二



63
53



084878-000-3

63-53

国文学史講話

藤岡 作太郎/著

M4 1 序

DBB-0052



